学校名：関西創価高等学校
学年：３年
名前：藤野　美紀子
題名：今思い出すべき視点

死と隣り合わせ、というのはああいうことを指すのだろう。私が小学三年生の頃、兄が白血病と診断された。同じ病気を持ち、同じ治療を続けてきた子どもたちが横で一人また一人と亡くなっていく。白血病というのは厄介な病気だった。

兄は退院できるのか、病気は再発しないのか、命は助かるのか――全ての境目が曖昧な世界で、母の口癖はこうだった。「それでも治療は行える」。どうして母がこう言ったのかはわからない。ただ、この言葉は自然と私の意識を「治療が受けられない人」に向けた。

漠然とした気持ちでＵＮＩＣＥＦのホームページを見てみると、ひとつのデータに釘付けになった。サハラ以南のアフリカ諸国では、肺炎・下痢・マラリアといった病気にかかっても治療を受けられない子どもが半数以上を占めるという。これはすなわち、経済的な理由から戦う環境さえ与えられず、命を落としてしまう子どもたちが世界には多くいるということだ。それに比べて私たちはどうだろう。病気を持ちながら、まだ曖昧な世界に「いられる」こと。それがあまりにも恵まれていることだと気づいたのはこのときだった。

兄が五年間の治療を通して病気を乗り越えられたのは、彼の体がアフリカの子どもたちと比べて丈夫だったからなどではない。日本の発展した医療技術とともに、高額な治療費を補助する医療費助成制度があったからに他ならない。この制度は、経済的な理由などによって治療を諦めることがないように、税金を用いて患者の治療費をサポートしてくれるものだ。命が助かる可能性を絶対に０％にさせない――たったそれだけで、どれだけの人に安心と前を向く希望を与えてきただろうか。これが税金の担う大切な役割のひとつなのかもしれない。

現代の日本は個人主義社会というそうだ。個性や能力が尊重される反面、「共に生きる」という共同体意識がだんだん薄れてしまっている社会だとも言える。しかし、そうであるからこそ、今一度「社会を共に作っていく」という全体観に立ち戻る必要があるのではないだろうか。納税、それ自体は個人が行う行為である。しかしそのゆく道をたどっていくと、ほかの支流と合わさって大河となり、岩をも動かす大きな流れとなっていく。また、思索を続けると、その流れが幾筋にも枝分かれし、再び自分のところへ澄んだ水をもたらしてくれることに気づくだろう。そこに意識的であり続けることが、これからの納税者に求められる資質ではないだろうか。

思いやりだけで命は救えない。しかし、税金が戦う場を作ってくれることで、その想いを力に変えて病気に立ち向かうことができる。そうであるからこそ、私は周囲への温かい気持ちを育みながら納税者としての責任をしっかり認識して果たしていきたいと思う。